

自己評価報告書(最終報告)

報告者

特別支援教育専攻
／島田 恭仁

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

現在次のようなテーマと計画を検討している。外部資金の獲得は難しいが、できれば科研費や民間の財団の研究助成資金に応募したいと考えている。

＜テーマ＞ 発達障害児におけるディスレクシアの実態把握。

＜計画＞ 特別支援教育の専門家チームによりLD・ADHD・高機能自閉症と判断された児童生徒を対象にして、ディスレクシアに関連する各種の心理教育的アセスメントを実施し、ディスレクシアに相当する学習困難を顕著に示す児童生徒や重複的に示す児童生徒の実態について検討を行う。

2. 点検・評価

「読み困難のアセスメントに関するパイロットスタディー」をテーマにして、LD児の実態把握を目的とした調査を実施した。調査の実施に先だって、民間の財団の研究助成資金に応募したが、応募者多数のため、残念ながら今年度は助成を受けることはできなかった。しかしながら、調査研究の成果はあがり、LD児の早期発見・早期対応に役立つ課題を作成でき、その信頼性・妥当性についての検討や、スクリーニング課題としての有用性についての検討を行うことができた。次年度には今年度よりも一層詳細な研究計画を立てることが可能になったため、次回は研究助成に採択される可能性が高まると期待している。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

当専攻では、大学院説明会での入試情報の提供のみでなく、他大学と関係諸機関(教育委員会等)・大学教員・学会関係者への大学院案内と入試要項の配布、教員個人による大学訪問、教師向け雑誌への広告の掲載、専攻行事に際しての入試情報の提供等の活動を行ってきた。特に、大学院説明会で当専攻に来談した学生(教員)は、当専攻を志望して院入試を受験する機会が多かったため、意欲の高い学生(教員)には、入試情報の提供が有効であることが分かった。従って、今後は、不特定多数の学生に入試情報を提供するのではなく、他大学や関係諸機関の特別支援教育に対するニーズについてあらかじめ調査を行ってみたい。

2. 点検・評価

前期には、大学院説明会の専攻・コース別懇談会で説明・相談を行った。5～6名の参加者があり、ある大学からは、先方の教員がゼミ生を連れて来談するなど、実りの多い懇談会を実施できた。他大学のニーズを十分に聴取した上で、当専攻の特色(取得可能な免許状・諸資格、修了生の進路等)を説明できたため、学生の志望動機を高めることができたと思われる。後期には、他大学を訪問して、先方のニーズを十分に聴取した上で、特別支援の専任教員に当専攻の詳細な情報を提供できた。その結果、先方の大学で院への進学希望が出た場合には、当専攻を推奨して頂けることになった。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ① 学部及び大学院の授業において、知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養すると共に、学生・院生に知的障害児・発達障害児のニーズに応じた実践的な指導を体験させ、卒論・修論の作成につなげてゆく。
- ② 院生に研究者としての自覚をもたせるため、学会への入会・参加を奨励して他大学の研究者と交流できる機会を提供する。さらにLD・ADHD・高機能自閉症に対応するための専門資格の取得を奨励する。

2. 点検・評価

- ① 学部及び大学院の授業において、知的障害と発達障害の詳細な説明を行い、前期の授業評価では大半の受講生から専門的知識を深めるのに役立ったという回答を得た。またゼミ生全員に知的障害や発達障害のある児童に対する実践的な指導を体験させることができた。学部生と院生は各々の事例で卒論・修論を作成し、研究生は事例を通じて特別支援学校のセンター機能について考察して報告書をまとめることができた。
- ② ゼミの院生に対して学会への参加を促し、自身の研究に関連したポスター発表やシンポジウムを傍聴させ、質疑応答の場で他大学の研究者と交流する機会をもたせることができた。また専攻の院生全員に特別支援教育の専門資格を取得するように奨励した結果、多数の院生が資格取得を希望するようになり、成果をあげることができた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- ① 小学校低学年の児童に文章音読課題(島田, 2012)と他の標準化された読み能力検査を実施し、両者の検査結果の間に相関的な関係が認められるか否かについて検討を行い、研究の成果を全国規模の学会において発表する。
- ② 文章音読課題にディスレクシアのスクリーニング課題としての有効性があるか否かについての検討を加え、研究の成果を全国規模の学会において発表する。

2. 点検・評価

- ① 低学年児に、自身で実験的に作成した文章音読課題と標準化された読み能力検査を実施した。その結果、文章音読課題の得点と読み能力検査の得点との間に、有意な相関関係のあることが確かめられ、文章音読課題の信頼性と妥当性について検討することができた。研究の成果を全国規模の学会において発表した。
- ② 多数の低学年児に、読み困難のスクリーニング検査を実施するとともに、自身で実験的に作成した文章音読課題を実施した。その結果、スクリーニング検査で読み困難があると判断された児童は、文章音読課題においても特徴的な結果を示すことが分かり、スクリーニング検査と文章音読課題を併用すれば、読み困難児の認知特性を詳細に確かめることができると考えられた。研究の成果を全国規模の学会において発表した。
- ③ 実験的に作成した文章音読課題の内容をより一層充実させるために、誤読分析のための規準作成を行った。完成した規準表に基づいて、平仮名読みの習得に困難を示す児童の音読についてのアセスメントを行い、読み困難のあるLD児の特徴を検討した。研究の成果を論文としてまとめた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ① 学内における各種委員会の委員として、本学の運営に参画する。
- ② 当専攻の院生が特別支援教育の専門資格を取得できるようにするために、専攻内のカリキュラムを充実させるとともに、資格認定協会との連携を密にして、専門資格の取得を希望する院生に対する全体的な指導体制を整える。

2. 点検・評価

- ① 就職委員、施設整備委員、学部2年生クラス担任等の役割を兼務した。就職委員会では、年間を通じて模擬集団面接・模擬個人面接の面接官として参加し、面接のロールプレーと講評を行った。施設整備委員会では、キャンパスゾーン計画・学生支援棟建設等に関する審議に参画した。クラス担任としては2年次合宿研修に参加して学生の指導に当たった。
- ② 専門資格取得のための大学院カリキュラムを充実させた。特に、資格希望者専用のフィールド研究を実施し、LD・ADHD・高機能自閉症等の児童に対する通級指導を体験させ、これらの児童が有する「読む・書く」「計算する・推論する」「行動のコントロール」「社会的スキル」のニーズを体感できるプログラムを編成した。その結果、10名の院生が資格取得を目指すようになり、内1名は最終試験に合格して、院在籍中に資格を取得できた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- ① 公立諸学校・附属特別支援学校・教育委員会等が主催する研修会に協力し、特別なニーズを有する児童生徒に対する支援のあり方について検討する。
- ② 教員や保護者と連携しながら、LD・ADHD・高機能自閉症等の児童に対する支援活動を広範に展開する。具体的には、これらの児童のために設置された通級指導教室へのコンサルテーションや、これらの児童に対する直接的なアセスメントと指導を行いたい。

2. 点検・評価

- ① 教育委員会が主催する通級指導教室担当者研修会に講師として参加し、通級指導を受けているLD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒に関する事例検討会を実施した。
- ② 特別支援教育の専門資格を有する教員で構成された研修会に講師として参加し、特に読み困難のあるLD児への支援の在り方について、海外での事例もまじえて講習を行った。
- ③ 教育委員会が主催する学校教育指導補助員(スクールアシスタント)研修会に教育支援講師・アドバイザーとして参加し、通常学級にLD・ADHD・高機能自閉症等の児童が在籍していた場合の支援方策について講習した。
- ④ 教育委員会が主催する発達・教育相談会の相談担当者となり、特別な支援を必要とする幼児・児童生徒に対する望ましい教育的対応について、保護者へのカウンセリングと助言を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

今年度は、大学院説明会や大学訪問において、他大学のニーズを十分に聴取した上で特別支援教育専攻の特色を説明することができ、先方の大学で院への進学希望が出た場合には当専攻を推奨して頂けることになった。また、通級指導担当の現職教員が参加する事例検討会、専門資格を有する現職教員が参加する研修会、学校教育指導補助員が参加する研修会等を催すことができ、LD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒の指導に関する意見交換を活発に展開できた。これらの事例検討会や研修会の機会を通じて、自身で行ってきた研究の成果を、特別支援教育の実践の場に還元することができた。さらに、大学院カリキュラムを充実させ、当専攻の院生が専門資格を取得できるようにプログラムを編成し、地元の特別支援教育に貢献できる人材の育成に寄与することができた。上述の諸点で、本学への総合的な貢献を行うことができたと言える。